

## 第六回 姫路の「トリックスター」

### ●皮革の産地、アルザス地方

リバティ大阪（人権博物館）で館長の朝治さんに会った時、明日姫路に行くと言うと「姫路にはおもしろいおっさんがおるやろ」とにんまりした。とっさに柏葉さんのことだと思ったが、彼の勇名は兵庫近辺だけでなく大阪にも鳴り響いているのだとつくづく感心したものだ。

柏葉さんに会ったのは二〇一三年のことだ。欧州の調査から帰って連絡をすると姫路の駅まで車を走らせて迎えてくれた。その車のなかですぐさま皮革談義が始まったものだ。

彼に会うよう勧めてくれたのは、長らく被差別部落の研究を続けてきた故中尾建次大阪市大教授だった。しかし、柏葉さんとは会うことが叶わないまま、中尾先生が故人となつてから、先生のお嬢さんでフランス文学研究者の雪絵さんとフランスのコルマールで会うことができた。その折、柏葉さんの話が出て、連絡先を教えてもらったのだ。

雪絵さんとアルザスのコルマールで出会ったとき、もうひとつの収穫があった。それはアルザス地方が有名な皮革の産地だと知ったことだ。

アルザス地方がドイツとフランスの戦争に翻弄され、両国間で取ったり取られたりされた地域だとは知っていた。それほどまでに重要だとされたことのひとつには、ここが皮革の産地だからということもあったのだ。

町をまわってわかったのだが、コルマールでは一九世紀まで、靴屋の通りや鶏肉屋通り、穀物商の通り、なめし人の通り、など同じ職種についている職人たちがギルドをつくって固まって住んでいた。「皮なめし人通り」に行くと、なめし工房だった家々が軒を連ねている。二階建ての窓からなめした皮が吊るされていたらしい。

アルザス地方にはグッチやエルメス、ルイヴィトンなどの高級ブランドに高級なめし革を提供する小規模なめし工場が集中している。

二〇一三年の時点では、フランスの産業自体の成長率が二パーセントだったのに、高級品皮革は五パーセントもの伸びを示していた。二九四〇億ドルに達する世界の高級品市場のなかで、皮革はその一七パーセントを構成している。

二一世紀に入ってから、フランスやイタリアなどの高級皮革ブランドは、いずれも昔ながらの伝統をもつ良質の皮なめし工場を次々と買収し、傘下に入れていった。

その動きがまだみられないのが日本である。良くも悪くも日本の皮革はグローバル化のなかで孤島になっているのだ。

### ●アルザス地方のなめしの家系<sup>i</sup>

欧米では、二一世紀までなんとか生き残った小さななめし工場は、それだけで伝統と品質の折紙つきだ。

アルザス地方ではなめしで何百年も続いている家系が工場を操業している。五〇〇年も続いている有名なダイガマン家はバール村にあり、創業者一族だけでなく、当時からその下で働いていたなめし業家系の人々の末裔もそこで働いている。

アイヒョーフェン村のハース一族が一九世紀に始めたなめしの工場も有名だが、現在の経営者はハース一族の跡継ぎの女性と結婚したミュラー氏の後裔によって経営されている。

一族の女性から他の一族に経営権が移ったとはいえ、なめし業や皮革業は、創始者の一族と姻族からなるネットワークによる生産と販売体制を守り続けるのだ。皮なめしの技はとても複雑で、企業秘密にあたるから、おいそれとは外に出せない。勢い限られたメンバーで秘伝が伝えられていく。それをなくしてしまっただけでは元も子もない。

### ●姫路の「ミスター・タンナー」

鹿革は、脳漿なめしという脳の酵素と油を使ったなめし方によるものだと柏葉さんに教えてもらって、お返しにヨーロッパの話をした。

柏葉さんは、興味深そうに聞き入っていた。それから、姫路の革づくりの村のことを聞くと、「それにつけても」と彼は、今は見る影もなくなったと自分の村のことを嘆き始めた。

彼の村は御着といい、高木村や龍野と同様、皮革の村だ。高木に働きに行き技術を身に着けた人々が明治以降厚手の革の靴底を手掛けていったのだという。

彼によると、明治時代、陸軍の練兵場が近くにあつて、その視察に訪れた明治天皇を村長が自宅で茶菓でおもてなししたそう。明治天皇が行幸あそばされた、という村の歴史が自慢のようだった。彼に連れられて御着をまわってみると、柏葉さんの話に聞いた通り、いたるところでなめし工場の跡が朽ち果てたままになっている。柏葉さんは、それでもほんの1-2件が「世界トップレベルの革をつくっている」と教えてくれた。彼のすぐ家の近くにあるなめし屋は「天然なめししかやりよらへんが、ほんま、世界レベルやで」という。それでもたった一軒だ。

毎年必ず工場が閉鎖されていき、今はほとんど操業している工場がない。もともと、一見ひどく落ち込んでいるようにみえるが、先進国のなかで日本はそれでもまだ中小なめし工場が生き残っているほうだ。

フランス全土でも、八〇年代は六〇軒以上あつたのが、現在では二〇軒以下になっている。それに比べると日本は御着と隣り合わせの高木地区だけでも八〇軒ほど残っているというから驚きだ。赤字経営のところが多いとはいえ、まだ操業している。

それでもなめし工場が七〇年代の好景気、皮革需要の頃のブームだった当時のことを聞きながら、比較して残念な気持ちがあつた。景気がよかつた七〇年代に将来のことを見据えて、何らかの延命政策をとっておけばよかつたのに、と思わずにはいられない。おそらくその頃は、皮革の好景気はずっと続くと思つていたのだろう。

「ムラの羽振りが良かった時、ムラの連中はあぶく銭をもって、どんどんつまらんことに使ってしまったさかい、今苦しい、言うとするんや。ゴルフ場経営なんか手えだしたやつもおるで。バブルがはじけて破産しよったけどな。夜逃げしよった。それは自業自得や」

### ● 柏葉さんの仕事の風景

御着にある、大きくて堂々とした家の前には、奥さんが毎日手入れをしているという立派な松が植えられている。一本も雑草が生えていない、よく手入れされた庭の一角にある納屋には、出来立ての白なめしの蹴鞠が何個も吊ってある。

そこで朝食に抹茶と和菓子を取り、すでに操業をやめた自分のなめし工房に出かけて行って、デモンストレーション用の革をつくる。伝統的なやりかたで白なめしをつくっては蹴鞠や文書箱にしている。

まず、近くの市川に浸して毛を抜きやすくした原皮を引き上げる。適温にしたぬかの発酵液にそれを一〜二日の間つけてさらに脱毛しやすくし、道具をつかってこそげとっていく。

削りすぎると原皮に傷がついて均等にならない。試しにやってみた私は叱られて断念した。細心の注意が必要だ。

川から三〇〜四〇キロはあると思われる原皮をひきあげ、その毛を抜いてこそげとっていくのは寒い冬の日などは特に大変だ。寒風ふきすさぶ工房で手が凍えそうになる。つらい仕事だ。

そんな柏葉さんの仕事ぶりを写真に撮りたいと、近所に住む「元有名テレビ局」のディレクターだった長谷川さんという「趣味のカメラマン」が時々スポーツカーでやってくるようになった。今はメディア系の科目を教える大学で教鞭をとる彼は、ビデオ制作もできる。柏葉さんのなめし革づくりの様子のビデオ制作を依頼してみたら、快諾された。

もともと私が柏葉さんの作業風景を撮影しながら一方で質問をしている様子を見て、その下手さ加減に我慢できなくなった長谷川さんが手伝いを申し出た、というのが正しいだろうか。

ビデオ制作の動機は、かねてから依頼されていた、英国のノースハンプトンでの日本の皮革の歴史についての講演が頭にあったからだ。柏葉さんをこの講演に同道しようと思ったのだが、ビデオをついでに上映すれば、私のような素人が言うより、もっと説得力があるだろうと考えたのだ。

ついでに長谷川さんに柏葉さんの「相棒」としてついて来てくれないだろうかとまたもや厚かましいお願いをしたのだが、案外とそれも引き受けてくれた。

写真を撮っているくらいの付き合いだから、柏葉さんの性格も熟知しているだろう。彼はせっかくならこの道中を楽しもうと思ったようで、ウェブ・デザイナーの娘さんを連れてくることにして、四人の旅がはじまった。

この英国行きは柏葉さんの生まれて初めての外国旅行だ。パスポートを取るのも初めてだったし長時間ジェット機に乗るのも初めて。無論英語もからきは話せない「ぼっと出」

の柏葉さん。彼は英国のなめし人たちの世界をどんなふうにとらえるのだろうか。私の大きな関心事でもあった。

### ●柏葉さん、英国に行く

二〇一三年春、柏葉さんらと別行動で香港からヒースローに向かった私は、結局一時間遅れで空港に降り立った。

ついてみると、なんと柏葉さんは出迎え役のピアソンさんと一緒に出迎え口で手を振っている。早くも一時間で現地に慣れたような雰囲気だ。英語と日本語の違いを超えた「雰囲気を読む力」「仕草や表情での表現」などのメタ言語で意思疎通には困らない人らしい。

自分でつくったお土産の蹴鞠や文書箱を持参していて、白革の「革の名刺」までふんだんに用意して配っていた。当然そんなユニークなお土産は喜ばれてどこでも大歓迎だ。

道中、彼はまったく緊張した風がなく、終始自信満々だ。私に通訳されていることすら忘れ、すっかり英国の人々と打ち解けて「会話」を楽しんでいくのだ。

空港からピアソンさんの運転で一気にノースハンプトンに向かう。ヒースローを離れるにつれ、次第に田舎道になっていく。ノースハンプトンに近づくと道に羊が目立ってくる。彼らが群れるなだらかな丘陵が続いていく。

なめし人というのはだいたい世界各国、素朴で気取らない人柄だ。ヨークシャーやスコットランドの訛りが強い英語で、世界中を巡ったエピソードや昔のギルドの規約などを延々と話しつつける。「皮革の話」にすぐさま没入する人びとだ。彼らがこの羊の群れを見ると、さしずめ「皮が何フィートとれる」とでも思うのだろうか、とふと考えてみる。

ロンドンに数年住んでいたころは、専門の研究のほうが忙しくて、ロンドンの外に出ることはほとんどなかったし、英国の歴史や文化自体を面白いと思ったこともあまりなかった。ロンドンにはコスモポリタンな都市なので、周囲には外国人や、イギリス人でもコスモポリタンな人びとが多かったのも影響していた。

ノースハンプトンを訪れるようになってようやく、伝統的なサクソン人やスコットランド人の文化に遭遇し、皮革を通して土着の文化に触れているという感慨を覚えるようになった。柏葉さんはどんなふうに関国の土着の文化を解釈するのだろうか。そんな興味も湧いてくる。

### ●柏葉さんのカルチャーギャップ

翌日、私たちは列車でノースハンプトンからチェスターフィールドまで向かった。

プラットフォームに立って列車の到着をまつ間も柏葉さんは周囲の観察に余念がない。

小柄で小太りの体軀に背広をきた体をちょっとそらせながら、日焼けした顔をほころばせて、何か楽しそうだ。彼が追っている目の先には若い女性がいる。プラットフォームのベンチに座っている女性を眺め、「あの子、きれいやなあ」とほれほれするようにため息をつ

く。

背筋を伸ばして本に目を落としている細面の若い女性の姿は一幅の絵のようだ。栗色の髪とつばの広い帽子をかぶり、襟にレースのついた英国風のワンピースを着ている。確かに日本人がイメージする古い英国の令嬢そのものだ。

「まるで映画みたいや。なんや、今わしも映画のなかにはいってもうたようや」  
柏葉さんはハリウッド映画のなかにはいりこんで登場人物のひとりになっているという自分を想像し、うっとりしていた。ほんの一日前には姫路の御着の自宅で抹茶を飲み、和菓子を食べながら蹴鞠をつくっていたのだから、カルチャーギャップがあっても当然だ。

### ●あざやかな屠畜の手際

チェスターフィールドでは屠場を見せってもらうことになっていた。これは長谷川さんの希望だったのだが、あいにくと写真撮影は許可されなかった。動物保護団体が「屠殺は残酷だ」とかみつくので、よほどのことがないかぎり写真もビデオ撮影も許可されることはないという。

チェスターフィールドは古くから皮なめしで知られている土地で、昔は森に囲まれていたところだ。新石器時代のころから森で皮をなめしていたらしく、泉が近くにある洞窟でも小規模ながら皮なめしをしていた。

このチェスターフィールドで古くから営業している植物なめしの工場と、屠畜工場をみることになっていた。

事務所で白衣を借り、長靴をはき、髪にシャワーキャップをして、浅い水槽を通って雑菌をシャットアウトしてから屠場に入った。

大きな牛がトラックでつぎつぎに運ばれてきて、気配を察して暴れる。それをエアガンで一瞬のうちに静かにさせてからすぐにフックに吊り下げ、コンベアーで屠畜人の目の前まで運ぶ。屠畜人はさっと大ぶりの鋭いナイフを突き立てて、一気に皮に切り込み、身から皮をはがしていく。外皮がきれいに剥かれると、次に待っている若者が内蔵を取り出しきれいに水洗いしていく。さっきまで生きていた牛の姿があつというまに精肉と化していくのに唾然としてただ見入るだけだった。案内に立った人は、「皮に傷がつかないように上手に切り裂くのが大事なんですよ」とそばからコメントする。大事な皮を、丁寧に素早く剥いでいく。腕の見せどころだ。聞くところによると、腕一本で生きていけるほど彼の収入はいいらしい。

### ●文化の違いを越えるコミュニケーション力

事務室にもどる途中、柏葉さんが小声で私に耳打ちする。

「さっきの屠場につれてってくれた女のひと、マギーさんいうたかな、ほんまにきれいやなあ。最高や。いままで見たうちで一番きれいやった」

ここ数日間で柏葉さんは何人かの英国の女性たちに会ったのだが、すばやくそのなかで序列をつけていたのだ。前日に会ったノースハンプトン大学の皮革研究所の所長のレイチェルさんも、「きれいな人や」と感心していたが、一番好みだったのは、あの「屠場で会ったひと」だった。翌日、皮革協会の面々にその話を披露すると、「屠場の女が一番！」というところでみながどっと爆笑した。屠場の女性に目をつけるところは、なんととっても牛との縁が深い柏葉さんならではだ。

柏葉さんのひっかきまわしはこんなものでは終わらない。

翌日の夜、ホテルの上階で皮革専門家協会主催のレセプションがひらかれた。ダンスが始まると、お年寄りに誘われて私もダンスに加わるはめになった。ところがふと周りをみると、ダンスの輪のなかに、柏葉さんがひとりで踊っている。相手がなくても平気で、音楽に乗って勝手なステップを踏んでいるのを見て、みな面白がっている。

皮革協会の会長夫人と話し込んでいると、彼女が私の背後を見ながら突然笑みをうかべた。「見て、見て！」と言う。つられて振り返ってみると、柏葉さんが、ウェイターよろしく背筋を伸ばして気取ってワインを各テーブルに次いで回っている。

日本式の「お酌」のつもりだろう。宴会の主催者になったつもりだろうか。ただ、欧州ではお酒はウェイターがつぐもので、ゲストが自らついでまわるような「サービス精神」はない。一〇卓にもものぼるテーブルを、柏葉さんは気取って次々と笑顔でお酌してまわっている。話しかけられているようだが、表情はにこやかなので、みな彼が英語を理解していると思ひ込み、笑いながらお酌されている。

彼は「メタ」レベルでのコミュニケーション力が抜群なので人に頼る必要もなく「おれが、おれが！」と臆せず人前に出ていく。特異な能力だが、こんな場面ではそれがむしろ自然なアピール力だ。

## ●トリックスター

生まれて初めての海外旅行で、おまけに自分が最も興味を抱いている皮革の専門家たちと堂々と渡り合い、尊敬を勝ち得た柏葉さんは、文字通りの破天荒さを見せ、周囲を面白がらせたりかき回したりする。

そういう、既存の秩序を破壊するような変化をもたらすような存在を、社会人類学では「トリックスター」と呼ぶ。だが、そんな特異な能力につきあわされる「普通の人々」は時には疲労困憊してしまう。

貧しい少年時代を過ごし、ボタ山から釘を拾い集めて売っていたという苦労話を語っていたこともあったが、彼の探求心を受け止めることができたのが皮革の世界だった。

皮革業はいい収入になるだけでなく、奥が深く化学者の知見と技術者の技能が必要とされる。重い原皮を担いで移動し、川に浸したりぬかの発酵液につけたりする時は温度の調整が大変らしいが、背割りと呼ばれる大きな皮を半分に割る作業、ドラムにいれて攪拌しな

から染色するときの染料の配分なども、経験がものをいう。

皮は一枚一枚すべて違うし、季節によってもずいぶん違うという。そんな話をしていると、彼の技術者の面が顔を出す。晩年になって、工場を閉じてから、彼は製革の歴史に興味をもち出した。そして古文書などを読み始める。結局そんな彼のところに皮革史研究の「おっちゃん仲間」が集い、にぎやかに勉強会などを催すことになる。

それでも、もっと日本の皮革についていろんなことを聞いてもらいたいという願望は膨れあがってくる。それが彼のフラストレーションでもあり、エネルギー源にもなっていた。

### ● 柏葉さんの「怒り」

翌日、ピアソンさんの案内で皮革博物館の展示を見て歩いた。

説明役のピアソンさんが一八世紀のイギリス国教会の大司教の礼服の前で立ち止まって説明する。「大司教の服は皮でできています。最高の礼服だから、重要な儀式の時にのみ着たのですよ」。

確かに西欧では大事な文書は羊皮紙に書いて残すし、王族は毛皮をまとい、革でできた装飾品や衣類を身に着ける。旧約聖書では神がエデンの園を追われたアダムとイブに最初に与えた衣が皮だったし、キリスト教の聖者ヨハネは自然のなかで毛皮をまとって暮らしている。説明を聞いていた柏葉さんが急に怒った表情になる。

「日本の仏教では、革は穢れているとか言うて、見下しよって、使いよらへんかった！ 礼服いうと、絹やった！」

英国では終始にこやかで笑みを浮かべていた柏葉さんだが、かつて日本で経験した不愉快な体験を思い出しているのだろうか。いぶかっているピアソンさんに私が日本の状況を説明すると、彼は苦笑して話をつづけた。

「英国では最近まで、上流階級の有力な家は、ほとんど皮革業関連のビジネスに関わっていました。それほど皮革は重要な産業だし、儲かったんですよ」

柏葉さんに通訳すると、拍子抜けしたかのように、表情が元通りになる。柏葉さんは英国では日本のなめし人として評価され、彼の苦労は英国の人びとにはあまり理解できない。それでもお互いに交流できる共通の場が皮革を通してつくられる。それを彼は体験したのだ。

皮革とともに繁栄を謳歌したノースハンプトン市の市長職は、今や名誉職となっている。

議会がすべてを決めるので、市民が推薦する「立派な人物」が市長に任命され、市のスポークスマンのような役割を担う。市長は、四〇〇年以上も前から使われている議事堂のなかにある、代々の市長が肖像画が掛かっているフロアーの、ひととき重々しい雰囲気の中で執務をする。代々受け継がれている宝石や刺しゅうをちりばめたガウンを着て、宝石に彩られたメダルを首にかけるのがそのスタイルだ。

柏葉さんは、ピアソン氏たちの好意で、市長にも会うことができた。市長は、遠方から訪

ねてきた皮なめし職人に敬意を表し、彼に自分のガウンを着せかける。金銀ダイヤモンドに彩られた重いメダルを首にかけ、同じく宝石に彩られた杖をもたせ、一緒に記念撮影までしてくれた。

本物の市長と一緒にガウンを着て写真に収まった柏葉さんは、胸がいっぱいになって笑みを浮かべ、泣きそうになっている。感動のあまりなのか、いつもと違って終始寡黙だった。

代々の市長の肖像画がずらりと廊下に並んでいるのだが、このなかには皮なめし人の家系に連なる市長も何人かいるという。

### ●皮革業の未来を思い描く

英国やドイツであれば称賛される技術でありながら、正当な評価をうけていない日本の皮革の技術。ここで育った子供たちが大きくなったとき、せめて日本の皮革づくりの伝統について知ることができる博物館や美術館が近くにあってどんなにいいだろうか。

高木村や龍野の若い企業家たちが日本の革を作り続けて利益を伸ばしていき、海外にも注目されるようになったらどんなに周囲のまなざしが変わるだろうか。

フランスや英国の革づくりの人びとや、アジアの客家や米国のユダヤ人たちと今の若者たちの世代ならば交流できる。代々皮革づくりの家系に育ってきた人びとが伝統を大事にするさまを自分たちの目でみて体験してほしいと思う。

そして海外の革づくりの人びととの文化的な連帯を感じてほしい。たとえ皮革をつくっていなくても、皮革のムラに生まれたことの伝統と文化の重みを大事に育て、皮革製品を手取る消費者たちと彼らの「ストーリー」を共有してほしいのだ。姫路界隈にはまだ残っている小規模なめし工場群。それぞれがもつ「特殊性」に満ちた「ストーリー」を大事に育て、それを次の世代に伝えていくことが、新たに日本の二一世紀の皮革の伝統をつくることにもなる。それを助けるのがトリックスターこと柏葉さんや、姫路の「歴史好きのおっちゃんたち」の次代への使命ではないだろうか。そんなことを思った。

### 参考資料

---

<sup>i</sup> Degermann, le cuir de passion, <https://www.degermann.com/presuk.html>,

Masidlover, N. 'French Tannery in Demand as Source of Top-Notch Leather Haas Uses Hands-On Techniques to Create Hides That Live Up to Labels' High Price Tags', WSJ, Nov. 6, 2013 6:59 p.m. ET

Deschandre, M-H. Cuir & Tanneurs en Alsace, Editions Coprur, 2002.